

男性と病

——エイズウイルスのもたらした男性差別——

水島新太郎

I はじめに

2019年12月初旬、中国の武漢市で新型コロナウイルス（COVID-19）の感染症が報告されて以降、国境を越えて感染者は拡大し、翌年2020年3月11日には世界保健機構が「世界的大流行（パンデミック）」を宣言した。「人間と人間でないものの相互作用」と題した連続講座を土台とする本稿は、このパンデミックから約40年の時をさかのぼった1980年代のアメリカを舞台に、当時アメリカで爆発的に広がりを見せていたエイズウイルス感染症のもたらした男性差別について、ハリウッド映画を資料に考察する。男性差別は英語でミサンドリー（misandry）と訳され、主に異性愛者の男性に対する嫌悪や蔑視を指す言葉として用いられてきた。本稿では、ミサンドリーが異性愛者の男性以外の男性に対する嫌悪や蔑視を指す言葉であることを前提に、ハリウッド映画分析を中心にその多義的な意味について新たな見解を示したい。

本稿の構成は以下の通りである。第一に、Ⅱでは男性と病について比較的近年の問題についてエイズ時代の問題と関連づける形で考察する。第二に、Ⅲでは歴史的背景として男性とエイズの歴史について、1980年代から90年代の20年間に時代をしばり、アメリカのエイズ・キルトの話を中心に論じる。最後のⅣ、Ⅴでは、本稿の主眼点であるミサンドリーについて、用語の定義・説明をした上で、代表的なエイズ映画作品のなかに描かれるミサンドリーを言語と視覚の両面から考察し、その定義について筆者なりの見解を示したい。

Ⅱ 男性と病

『王様も文豪もみな苦しんだ性病の世界史』において、著者のビルギット・アダムは、15世紀にヨーロッパで広がりをもせた梅毒の感染から20世紀のエイズ問題までの性病の歴史について考察している。本書の冒頭でアダムは、15世紀にヨーロッパ各地で流行った梅毒に言及し、セックスと病の関係を次のように述べている。「この時代ほど(15世紀ほど)、セックスのアバンチュール(冒険)が人々の生活に痛みを、いやそれどころか、ときとして死の苦しきをもたらしたことはいまだかつてなかった」。¹⁾梅毒やりん病といった性病の治療が確立されていなかったこの時代、人々は病気のもたらす痛みにさぞ苦しめられたことだろう。しかし、医学の進歩した21世紀のいま、アダムの言うセックスのアバンチュールは、性病からくる身体的苦痛とはべつの、差別やスティグマ²⁾といった精神的で概念的な苦痛をもって人々を苦しめ続けている。

先述したアダムの言及しているセックスとは、因習的に男女間の性行為を意味しているが、

歴史を振り返っても、同性間、特に男性間におけるセックスによってもたらされる性病は常に差別やスティグマの対象とされてきた。例えば、エイズウイルスは、それが登場した1980年代当初、「ゲイのペスト」(“gay plague”)や「ゲイのガン」(“gay cancer”)と呼ばれ、エイズが正式に「後天性免疫不全症候群」と名付けられるまで、グリッド (GRID = ゲイ関連免疫不全; Gay-related immune deficiency) やアシッツ (ACIDS = 後天性コミュニティ免疫不全症候群; Acquired community immunodeficiency syndrome) の名称で認識されていた。グリッドのGがゲイを指し、アシッツのCがゲイ・コミュニティを指していることは明らかで、これらが男性同性愛者に対する差別をベースとした名称であることは疑う余地がない。

コレラ、ペスト、らい病、梅毒、そしてエイズなど、伝染病や感染症の最初の発生源となる人間を男性、女性のいずれかに特定することはできない。しかし、最初のエイズ患者としてアメリカの米疫病対策センター (CDC) が認定したのは、男性同性愛者だった。日本でも1985年3月22日に、アメリカ在住の日本人男性を、日本人「第一号患者」として発表している。³⁾ アメリカで制作された数多くのエイズ映画も、主要な登場人物の大半は男性同性愛者が占めており、このような男性差別的ミサンドリクな偏見は、コンプライアンスを厳守する現代においても差別的な形ではないものの、テレビの報道やSNS上において散見される。例として、2022年に入ってアメリカを中心に広がりをみせているサル痘 (monkey pox) の流行に関する情報拡散のされ方を取り上げてみよう。

コロナ禍の2022年8月4日、アメリカ政府がサル痘の広がりを危惧して、公衆衛生の緊急事態を発令したことは記憶に新しいだろう。アメリカのCDCによると、2022年10月4日の時点でサル痘の感染者数は26194人にのぼる。ここで着目すべきことは、TwitterやYouTubeを中心に、サル痘感染が男性同性愛者たちの間でのみ広がりをみせているといった誤情報が拡散されていることである。⁴⁾ サル痘報道にみられる同性愛者男性に関する誤情報の拡散は、本稿の最終項目で紹介するエイズ映画で描かれている1980年代エイズ流行の初期のゲイ・コミュニティに対する偏見報道を彷彿とさせる。サル痘の流行に対して、米ジョージア州・下院議員のマージョリー・テイラー・グリーン (Marjorie Taylor Green) は自身のTwitterで、「もしサル痘が性病なら、なぜ子供たちに感染が広がっているの?」と発言し物議を醸している (図1)。



図1 マージョリー・テイラー・グリーン議員のTwitterページ

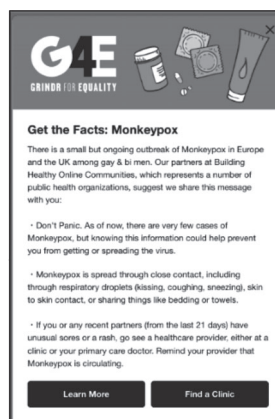


図2 ゲイ男性出会い系アプリ グラインダー内の広告

反LGBTQ+ 議員として知られるグリーンがこの発言に、多くの人びとは「LGBTQ+ の人々＝小児性愛者」といった暗示が込められていると批判の声をあげている。また、小児性愛者の加害者の大半が男性であることを考えると、グリーン Tweet は、明らかに同性愛者であり男性である者に対して発せられていることがわかる。これ以外にも、YouTube においてサル痘を性的マイノリティ特有の病として紹介する動画が多数アップロードされており、「ゲイの乱交パーティに行くな」といった根拠のない発言が飛び交っている。また、アメリカのゲイ男性向けの出会い系アプリ「グラインダー（Grindr）」では、サル痘や医療機関に関する広告情報がアプリ内に表示されるようになっており、これが意味することは、身内の間でもこの病に対して懐疑的な見方が錯綜しているということだろう（図2）。アメリカ三大ネットワークのひとつ NBC 傘下のニュース制作子会社 NBC ニュースでは、キャスターが次のようにサル痘を紹介している。「心配すべき病、それはサル痘です。医師たちによると、ゲイ男性たちの間で流行っていることがわかっています」（“another disease to worry about – monkey pox. Doctors found a number of cases in men who had sex with men”）。⁵⁾ これらの数例からもわかるように、近年においても同性愛者の男性たちは依然として性病に所縁ある人間として位置付けられ、80年代のエイズ時代から脈々と受け継がれてきた差別やスティグマの対象として扱われているのだ。次項では、男性とエイズの歴史について、アメリカのエイズ・キルトの話を中心に考察する。

Ⅲ 男性とエイズの歴史ーエイズ・キルトが象徴するもの

1981年6月にアメリカのCDCは、西海岸のカリフォルニアに住む同性愛者の男性たちの間で原因不明の病気が流行していることを発表し、これが、いわゆるアメリカにおけるエイズの最初の公式報告であるとされている。このことが理由で、1980年代がエイズの歴史のはじまりの年代として認識されているわけだが、ウイルスの潜伏期間が5年から10年であることを考えると、実際のアメリカにおけるエイズの歴史は1970年代半ばあたりからはじまっていると言える。エイズに感染した人びとは、しばしばPWA（People with AIDS）やPLWH（People living with HIV）の略称で表現され、身内の感染で影響を受ける人びとはPAWA（People affected with AIDS）と表現される。1970年代半ばから広がりを見せたこの病気は、1981年に正式にエイズと呼ばれるようになり、多くの人が命を落とすことになる。⁶⁾



図3 NAMES プロジェクトのエイズ・メモリアル・キルト。20641 枚のパネルが展示されている（1992年）

図3は、アメリカの NAMES プロジェクトによって集められたエイズによって亡くなった人々の名前が編み込まれた記念キルトを写した写真である。場所は首都ワシントン D.C. にある、初代大統領ジョージ・ワシントンに記念して建てられた石の塔がそびえ立つナショナル・モールの敷地内。死者を尊ぶメモリアル（記念碑）として作られたエイズ・キルトは、表面に様々な特徴ある絵柄が色鮮やかに縫われており、エイズで亡くなった故人の名前も縫い込まれている。縫われた名前から故人が判明し、故人が男性である場合、同性愛者としての疑いをかけられることになる。これは、キルトを介してのカミングアウトを意味し、故人のみならずその家族もスティグマや差別をこうむることになる。キルトを介してとはいえ、秘密を宣告（アウトイング）されることは、故人の家族にとって屈辱的なことだったはずだ。

伝統的に、キルトは女性たちの手作業によって縫われてきた。そのような経緯を踏まえ、女性や同性愛者の男性を同じカテゴリー内に位置付け、弱者として手を取り合う者同士として捉えることはできないだろうか。事実、「合衆国におけるエイズ・コミュニティの形成は、ボランティアリズムという特殊なコンテクストにおいて、まずはゲイ男性、レズビアン女性、それに異性愛者の女性たちの側で生まれた」⁷⁾とされている。エイズ・キルトは、男女の友情のシンボルとして位置付けることができるのだ。

男女の友情の例として、1950年代のハリウッド黄金期、女性たちの間で人気を博し「セルロイド・マスキュリニティ」(“celluloid masculinity”)⁸⁾を象徴する俳優の一人として知られるロック・ハドソンと女優エリザベス・テイラーの関係を挙げておきたい。同性愛者であることを隠し、偽装結婚も一度していたハドソンは、1985年10月2日にエイズを発症し亡くなった。数多くの男らしい役を演じ、最もエイズから遠い存在として人気を博していたハドソンのエイズによる死は同時に、彼の同性愛性をアウトイングすることになった。そして、故人となったハドソンを擁護したのが、彼が代表作『ジャイアンツ』（1956年）で共演した女優のテイラーだった。彼女はハドソンの死を悔やみ、1993年に「エリザベス・テイラー・エイズ基金」を創っている。ハリウッド以外にも、1980年代後半には、エイズを含め同性愛に関する偏見報道に抗議することを目的に、グラッド（GLAAD）という団体が立ち上げられ、英語の頭文字を取って付けられた団体名の The Gay & Lesbian Alliance Against Defamation からわかるとおり、エイズ・キルトと同様に男女の友情が基盤となっていることがわかる。⁹⁾

エイズ・キルトは、故人である男性同性愛者のアウトイングを助長した一方で、マイノリティの女性と男性が相互に扶助し合う活動への道筋も作った。しかし、エイズ・キルトはそのような男女の友情のシンボルであった一方、それが記念碑の対象として表象していた大半は同性愛者の男性であったのも事実である。ワシントン D.C. のショッピング・モールに展示されたパネルの大半をみても、当時、エイズによる死者の大半を同性愛者の男性が占めていたため、彼らのための記念碑として存在している印象が強く残る。エイズ・キルトは、同性愛者の男性たちを女性の代わりとして、社会における他者として象徴する役割を果たしていたと解釈できるだろう。

エイズのように同性愛者の男性のみに結び付けて考えられてきた病は他にないとする意見が、1990年代に男性ジェンダー研究者たちの間で上がっている。¹⁰⁾ このことが原因で、女性エイズ感染者への情報提供が正しく行われず、実際、「エイズの女性患者は男性患者よりも早く死ぬことが多かった」¹¹⁾。先述した感染者の略称 PWA にも付随するが、2022年代の現在でも呼び方は

新しくなったものの、依然として男性と性的経験を持ったことのある男性をGBQMSM（Gay, bisexual, queer and other men who have sex with men）と呼んで、エイズ感染と結びつけて取り上げる傾向にある。¹²⁾ このように、エイズがあまりにも同性愛的な指向をもつ男性特有の病として規範化され語られてきたため、異性愛者の男性にとって無縁な病であるとする考えが流布し、そのことが異性愛性を基盤とした男性差別、ミサンドリーを強化したと言える。こうしたミサンドリー表象は、1990年代に制作された数多くのエイズ映画から言語と視覚の両面で読み解くことができる。次章では、ミサンドリーという言葉の定義や新しい見識について考え、映画のなかで描かれるミサンドリーについて分析する最終章へとつなげたい。

Ⅳ 男性差別（ミサンドリー）の定義について考える

ミサンドリーは日本語で男性差別、男性嫌悪、男性蔑視と訳される。男性差別ひとつをとっても、「どのような男性に対する差別なのか？」といった疑問が浮かぶように、ここではこの言葉に関する定義について考えたい。

ミサンドリーという言葉を用いた代表的な著書として、ポール・ナサンソンとキャサリン・K・ヤングの共著『広がるミサンドリー — ポピュラーカルチャー、メディアにおける男性差別』（2016年）が挙げられる。両氏は共にカナダ・マギル大学で教鞭をとる宗教学者であり、この著書以外に『立法化されるミサンドリー』や『聖域化されるミサンドリー』など、ミサンドリーに関する著書を多数出版しているが、本稿では主にエイズ映画を分析対象としているため、ポピュラーカルチャーに焦点をあてた本書を取り上げたい。『広がるミサンドリー』において、ナサンソンとヤングはミサンドリーを次のように定義している。

ミサンドリー（男性差別、嫌悪、蔑視）は、

- ① ミソジニー（女性嫌悪、女性蔑視）という性差別のカウンターパート
- ② ポピュラーカルチャーに浸透していて、利用されてきた
- ③ あまりにも浸透しすぎていて、ほとんどの人が認識することができない
- ④ ミソジニーと異なり、何十年も無視されたり軽視されてきた
- ⑤ 女性中心主義を支えている¹³⁾

本書では、上記5つの点からミサンドリーが定義されている。①～②の定義は、ジェンダー学を専門とする者にとっては比較的受け入れやすい定義である。これら2つの定義が示唆するとおり、差別や蔑視という点で、ミサンドリーはミソジニーと対等な立場にあり、言語と視覚の両面で大衆文化に浸透し、利用されてもいる。③～⑤の定義からは、ジェンダー平等の流れにおいて女性やミソジニーが注目され問題視される一方で、昔からポピュラーカルチャーにおいて描かれてきた男性差別・ミサンドリーがあって当たり前かのように扱われ、女性擁護の道具として使われている、とする著者の考えが読み解ける。著者の一人がキリスト教の専門家であることを考えると、ここでのミサンドリー定義は反フェミニズム思想を基盤とし、フェミニズムへのバックラッシュ、男性の逆差別問題への訴えかけとして捉えることができる。そして、

最も重要な点は、ミサンドリーを定義するにあたって両氏の頭の中にある男性像が「異性愛者の男性」に限定されていることである。①の定義からもわかるとおり、この著書のなかで分析されるポピュラーカルチャーの多くは男女関係を基盤にしたものであり、男性同士の関係からみえてくる男性という性別の多様性が全く考慮されていない。¹⁴⁾ 両氏の定義からは、1980年代にアメリカの詩人ロバート・ブライがグリム童話『鉄のハンス』を用いて、少年が一人前の男になるには巨人のハンスと共に外の世界へと旅に出てイニシエーション（通過儀礼）を経る必要がある、といった教訓物語を軸にしたミソポエティック運動といった、男性性の復権運動、さらに言えば、男性への逆差別問題への喚起が読み取れる。

『広がるミサンドリー』の中では、映画『羊たちの沈黙』（1991年）に対する言及があり、この映画に出てくるハンニバル・レクター博士のモデルとなったジェフリー・ダーマーは同性愛者であり、性交渉をもった男性ばかりを殺害した人物として知られているため、本書は同性愛者の男性へのミサンドリーも視野に入れているとする反論もできるだろう。しかし、『羊たちの沈黙』のレクター博士の役割は、刑に服す囚人で、FBI捜査に協力する精神科医であり、あくまでフィクショナルな登場人物として設定されている。また、映画の中のレクターは、男性と女性を殺した人物として設定されているが、彼のモデルとなったダーマーは男性しか殺していない。¹⁵⁾ むしろ、著者たちは、同性愛者の男性がモデルになっていることには関心がそこまでなく、レクターをはじめとする男性登場人物の描かれ方がミサンドリックであり、両氏の言葉をそのまま引用すれば、「『羊たちの沈黙』（1991、監督ジョナサン・デミ）はフェミニストによる男の暴力に対する「講義」だ」と結論付けられる。¹⁶⁾ ここで、本稿なりのミサンドリーの定義を提示してみたいと思う。

ミサンドリー（男性差別、嫌悪、蔑視）は、

- ① ミソジニー（女性嫌悪、女性蔑視）という性差別のカウンターパート
- ② ポピュラーカルチャーが男性中心的に広がったため、そこに浸透している部分があり、利用されることもあった
- ③ 社会が男性優位・男性中心で形成されてきたため、ほとんどの人がそれを認識する必要性を感じなかった
- ④ 男性による男性差別を明らかにする（男性の多様性の認識）
- ⑤ ジェンダー平等主義を支えている

①の定義は変える必要性がないため、先述した両氏の定義をそのまま用いている。②～③の定義は、両氏の定義にジェンダーの観点で公平な修正を加えたものとなっている。④の定義は、ミサンドリーという概念が、エイズ・キルトの話の中で男女の協力関係について言及したとおり、対女性のみならず、男性の男性に対する差別、嫌悪、蔑視を明らかにし、さらには、男性の多様性の認識を可視化する概念であるということ considering して定義した。

この世の中には、異性愛者の男性、同性愛者の男性、両性愛者の男性、トランスジェンダーの男性など、様々な男性がいる。男性を細分化し、男性が男性に対してどのような態度を取るがゆえ差別が起こるのかを考えることのほうが、男性の女性に対する態度に目を向けることよ

りも重要であると考え。なぜ異性愛者の男性は、自分たちと異なる男性、例えば女性的な男性や同性愛者の男性を嫌悪、蔑視するのだろうか。男性の男性に対する意識や行動に目を向けることで、男性の多様性は明らかになる。このことを男性学の分野は1990年代から今日まで問い続けてきた。次項では、エイズ映画におけるミサンドリーに着目し、④の定義を重視する形で、異性愛者の男性によるそうでない男性たちへのミサンドリーについて、言語と視覚の両面から考察し結論へとつなげたい。

V エイズ映画に描かれるミサンドリー

エイズは、歴史的に同性愛者の男性特有の病として位置付けられてきたが、1980年代、同性愛者以外のエイズ感染者についての言及は成されていた。エイズ感染のハイリスク集団を示す「4Hs」という表現があり、これは同性愛/ホモセクシャルの頭文字のH、血友病患者/ヘモフィリアのH、ヘロイン使用者のH、ハイチ人のH、これら4つのHの頭文字をとった言葉として知られている。¹⁷⁾ ハイチに関しては、アメリカにおける発生起源をたどると、1969年にハイチから来た移民にまで遡れることが遺伝子研究で明らかになっている。本項目では、エイズ映画に描かれるミサンドリーを考察し、ミサンドリーの新たな定義を提示する。ここで取り上げる映画は以下のとおりである。

<i>Longtime Companion</i> (1990)	初期のゲイ・コミュニティにおけるエイズ感染
<i>Philadelphia</i> (1993)	エイズ感染による失業問題
<i>KIDS</i> (1995)	異性愛者男性のエイズ感染
<i>The Cure</i> (1995)	輸血によるエイズ感染
<i>Trainspotting</i> (1996)	麻薬とエイズ感染

エイズ映画の多くは1990年代に制作されており、これらの作品を選んだ理由は、エイズの感染経路として主に以下の3点があげられるからである。

- ① 性交渉
- ② 静脈に注射する麻薬使用
- ③ 輸血や血液製剤の投与

また、エイズは誰でも感染しうる病気である。この点も踏まえ、異性愛者の男性のエイズ感染に関する作品（『KIDS』と『The Cure』）を選んだ結果、5つの作品を取り上げることとなった。また、作品の選別に際して、エイズ映画における肯定的・否定的イメージ分析を中心に考察を展開するカイロ・パトリック R・ハートの著書『エイズ映画－映画とテレビジョンにおけるパンデミック表象』（*The AIDS Movie: Representing a Pandemic in Film and Television*）も参考にした。¹⁸⁾ 参考までに、エイズ映画というジャンルに対するハート独自の定義を以下に提示しておきたい。ハートによるとエイズ映画は、フィクション、ノンフィクションの映画作品を指し、

そこに登場する登場人物は、

- ① HIVに感染していて
- ② エイズを発症していて
- ③ 近年、エイズによって愛する人を失い悲しみに暮れている人びとである。¹⁹⁾

本項で分析する5作品は、当事者の経験や病気に関する事実に基づいて制作されているため、映画の内容とオーバーラップする実際の感染者の声という記録（二次資料）も引用しながら考察を進めていく。

元祖エイズ映画として知られる『ロングタイム・コンパニオン』は、1990年にノーマン・ルネ監督のもと制作された作品である。舞台は、ゲイ・コミュニティにおいて新種のガンが流行していた1981年のニューヨーク、主人公でゲイのウィリーと彼のゲイ仲間たちを取り巻く友情と悲しみの9年を軸に物語が展開される。本作の冒頭では、ニューヨークのファイアー・アイランドのビーチハウスで、ゲイたちが音楽に合わせて踊ったりパーティを楽しむ場面が自然に演出されているが、そのようなゲイ・コミュニティにおける音楽とダンスの娯楽は1960年代以降流行ったディスコ文化からきたものである。ディスコはゲイ・コミュニティで発展した音楽文化であり、時としてゲイ男性のクルージング・スペース（日本語では「発展場」と訳される）、性行為を行う場所としての役割も果たしていた。ニューヨークのゲイ・ディスコにインスピレーションを受け結成されたヴィレッジ・ピープルという男性6人グループの大ヒット曲「Y.M.C.A.」の歌詞の一部を以下に引用する。

I said, young man, (言っただろ、若者よ)
when you're short on your dough (金のない時にはピッタリなところさよ)
You can stay there, and I'm sure you will find (そこに行けば間違いなく)
many ways to have a good time (楽しいことがあるって場所だよ)
It's fun to stay at the Y-M-C-A (YMCAに泊まるのは最高だぜ)

アメリカ合衆国前大統領のドナルド・トランプが演説の際にテーマソングとして使用していた曲であるが、彼はこの曲の歌詞が暗示するホモエロティシズムについて認識していたのだろうか。歌詞にある「楽しいことがあるって場所だよ」の部分は、言うまでもなく、YMCAが性行為を行うクルージング・スペースであったことを暗示している。²⁰⁾『ロングタイム・コンパニオン』をはじめとする多くのエイズ映画では、こうしたクルージング・スペースにおける性交渉が原因のエイズ感染が、言語と視覚表象の両面から強調され、事実、本作においても登場人物の間で、「ゲイに性行為を自粛しろなんて、ばかげてる」といった言葉が交わされている。

『ロングタイム・コンパニオン』の特徴として挙げられるのは、当時、一般に誤って流布していたゲイとエイズに関するステレオタイプ・イメージが作品の各所にちりばめられている点である。主人公のウィリーの友人ジョンが原因不明の病（エイズ）に侵され人工呼吸器をつけ、

医師から肺炎であると宣告されるシーンなど、事実には正確な描写がある一方、例えば、主人公のウィリーが、友人のデイビッドの恋人で、エイズ感染のため入院中のショーンのお見舞いに訪れる場面で、両者はチークキスをかわすが、その後、ウィリーが便所に行き、過剰なまでに手や頬を洗い流そうとする描写がスクリーン上に映し出される。ショーンの部屋にあるトイレなためか、ウィリーがトイレの水を流す際に足でレバーを押す場面など、一見過剰演出にもみえるが、当時の人びとにとってこの病は未知の病であり、こうした光景は映画のなかだけの話ではなかったのだ（図4）。現代では感染者の便座や食器を共有したり、握手やキスで感染しないことが教育の甲斐もあって認識されているが、80年代の当時、ロナウド・レーガン大統領がエイズの対策・教育費に充てた額は、洗剤会社の新商品宣伝費程度でしかなく、アメリカ国民の多くが、この病に対して過剰に反応していたことは容易に想像できる。²¹⁾ レーガンは、先に触れた首都ワシントンD.C.でのエイズ・キルト・メモリアルにも足を運ばなかったとして批判されている。



図4 主人公ウィリーがエイズに感染したショーンを見舞いに訪れる場面
（映画『ロングタイム・コンパニオン』より）

『ロングタイム・コンパニオン』の物語全体にミサンドリーを見るとすれば、それは異性愛者男性のみに対する蔑視や嫌悪ではなく、同性愛者の男性に対するものでもあることである。しかし、誰による誰に対するミサンドリーであるのか突き詰めて問うと、エイズが原因不明の病として位置付けられていた80年代の主にゲイ・コミュニティに焦点を絞って物語が展開する本作においては、むしろ興味深い点ではあるが、主人公のウィリーのショーンに対する態度からも読み取れるように、本作のミサンドリーは同性愛者男性による同性愛者男性に対する「同胞間のミサンドリー」として理解されるべきだろう。²²⁾ 本作を出発点に、次に同性愛者の男性に対するミサンドリーが言語と視覚の両面から描かれている映画『フィラデルフィア』へと話を移したい。

映画『フィラデルフィア』は、『ロングタイム・コンパニオン』同様に、エイズ感染の初期を舞台に1993年に制作されたエイズ映画である。本作は、一流法律事務所に勤務するトム・ハンクス演じる主人公で弁護士のアンドリュー・ベケットが、エイズ感染を理由に事務所から解雇宣告を受け、デンゼル・ワシントン演じる黒人弁護士ジョー・ミラーの尽力のもと、事務所側と法廷で争う様を描いたエイズ映画である。

『ロングタイム・コンパニオン』と同様に、本作も、ゲイがエイズに感染した原因がクルージング、つまり性行為を目的とした発展場巡りにあると主張する、異性愛者の男性コミュニティの考えが中心に展開され、そんなヘテロセクシャルでホモソーシャルなコミュニティにおいて仕事をクビになり、訴訟をきっかけに自身のジェンダー・アイデンティティを無理やりアウトイングされるはめになったゲイの男性の戦いを描いている。また、黒人弁護士による白人エイズ

感染者の男性の弁護という設定など、異人種間の相互関係も軸に物語は展開していく。ゲイであることを理由に仕事をクビになる事例は、本作の舞台である1990年代のアメリカにおいて多数起こっており、1992年から2年間、19歳から25歳のエイズ感染の男性当事者に取材を行い書かれた *Youths Living with HIV: Self-Evident Truths* の著書の中でも、感染を機に職場での待遇が一変したり、郊外よりも都市での生活のほうが困難を伴うといった、本作で描かれるエイズ感染者男性の経験と共通する問題が当事者の声という記録で収められている。²³⁾

異性愛者の男性社会による同性愛者に対するミサンドリーが如実に言語と視覚の両面で描かれている本作であるが、本作のオープニングには、Condom Nation というお店にゲイ・カップルらしき男性二人が入っていく場面がさりげなく挿入されており、そこには、病気の予防喚起という製作側の意図とはべつに、映画のなかで争われる、性行為によってエイズを移された主人公アンドリューが法律事務所をクビになるのは自業自得であるとする相手側の弁護士のゲイ・クルージング文化批判が込められており、観る側がゲイ男性であれば、偏見的でミサンドリックなイメージとして受け取ることだろう。

この作品では、ダイアログ、つまり登場人物の会話という言語表象から様々な差別的発言が法廷を舞台に飛び交う。例えば、主人公アンドリューの法律事務所の重役たちは、親睦を深めるためにしばしばラケット・クラブを開催するが、ラケットの試合後に汗を流すために大浴場でホモソーシャルな時間を過ごす場面がある。この場面は映画の序盤で登場するが、そこで重役たちは、女性のオルガズムに関する猥談に華を咲かせる一方、ゲイの男性について蔑視用語である faggot (ホモ) という言葉を用いて、「ホモたちは女たちのようにいくふりをするのか?」(“how does a faggot fake an orgasm?”) といった話で盛り上がっている。

上記のような言語的ミサンドリーは、法廷の場面においても展開される。例えば、アンドリューに訴えられた重役側の女性弁護士が彼に、「あなたはゲイが性行為におよぶためにたむろする映画館に行ったことはありますか?」「パートナーがいるのにそういう場所に行くのはどうなのでしょう?」(“When you had your anonymous sexual encounter in the porn theater?” “So you could have infected him, isn't that right?”) といった偏見に満ちた質問をおつける場面が例として挙げられる。当時の理不尽なまでに偏狭した同性愛者に対する異性愛者側のミサンドリーが実直に描かれている一例と言えるだろう。

この作品では、視覚・イメージとしてのミサンドリーも固定した形で描かれている。その例として、アンドリューが事務所の男性連中にゲイであることがばれた要因として、彼の額に徐々に浮き出た紫色のあざがメタファーとして用いられている(図5)。



図5 主人公アンドリューが上司に額のあざを指摘される場面

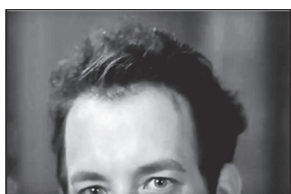


図6 裁判の場面
(映画『フィラデルフィア』より)

感染の流行期にエイズに感染した若者の声を取めた医学ニュース・レポーターのジーン・ブレイクによる著書『Risky Times – エイズは若者を見逃してはくれない』において、取材を受けた23歳のジョンは、「鼻のてっぺんにできた紫色の腫れものに、つつい気を取られてしまう」「それはエイズ患者に特有の、カボジ肉腫の徴候なのだ」と、当時の社会において紫色のあざが何を意味していたのかについて実直に語っている。²⁴⁾『フィラデルフィア』では、主人公のアンドリューが周囲の目を気にして友人のメイクアップアーティストに頼んで、紫色のあざをファンデーションで消してもらった場面など、映画を通してあざがエイズ・イメージとして繰り返し描き出されるが、同じ演出は比較的近年のエイズ映画『Dallas Buyers Club』（2013年）でも見られ、エイズ・スティグマとして定着していることがうかがえる。『フィラデルフィア』では、法廷闘争の最後、あざが病気の深刻さを陪審員に訴えかける上で功を奏し、あざのおかげでアンドリューが勝訴するという形で物語は終結する（図6）。ここまで、映画『フィラデルフィア』を例に、異性愛者の同性愛者に対するミサンドリーを考察してきたが、次にエイズに感染した異性愛者の男性を主人公として描く2作品を取り上げ、ミサンドリー表象についてのさらなる考察を展開する。

『KIDS/キッズ』は、映画監督で脚本家ハーモニー・コリンが19歳の時に書き上げた脚本を1995年に映画化した、ラリー・クラークの監督デビュー作品である。本作は、自身がエイズに感染していることに気づかず処女との性行為にのめりこむ主人公の少年テリーを中心に、彼に処女をささげエイズに感染し苦悩の日々を送る少女ジェニーなど、アメリカの少年少女の間に蔓延するセックス、酒、麻薬乱用の問題を描いたエイズ映画である。

本作は基本的には異性愛者の間で広がりを見せるエイズ問題を描いた作品であるが、ここまでで紹介した作品同様に、本作においても、同性愛者に対する言語的・視覚的ミサンドリーは定番のごとく描かれる。例えば、テリーや彼の友人キャスパーたちが広場で遊んでいるところにゲイ・カップルが通りすぎる場面がある。彼らはこのゲイ・カップルに向かって、「こいつらは病気だ、クソつたれのホモ野郎が」（“That shit is sick. Fuckin faggots”）と暴言を吐き捨てる（図7）。他のエイズ映画においても定番の言語的ミサンドリーが本作においても展開されているのだ。

ここで、本作のヒロインであるジェニーに着目したい。先述した *Youths Living with HIV* の著書でも、彼氏にエイズをうつされた22歳の白人女性など、女性感染者の声が紹介されているが、ジェニーのような境遇に立たされた女性は実際数多く存在していた。²⁵⁾『広がるミサンドリー』で、著者のナサンソンとヤングは本作、特にジェニーの描かれ方について触れている。両氏はジェニーに言及する形で、本作を次のように評している。映画『KIDS/キッズ』の「視聴者は少女に同情を感じるが少年に同情を感じないように操作される」²⁶⁾。確かに、映画の後半部分はエイズに感染したことに打ちひしがれ、テリーにそのことを告げようと彼を探して街をさまよう意気消沈状態のジェニーの描写が多く挿入され、視聴者の中にはそんな彼女の姿に同情する者も多くいたことだろう。また、テリーの行動や発言の多くが、あまりにもグラフィックで、時としてセックス好きの未成年男子たちのストレートな気持ちを代弁しているかのように表現されるがゆえ、視聴者のなかにテリーの演じる女性蔑視的でミソジニスティックな男性像に嫌悪感を覚える人がいても不思議ではない。「若い時は、中出ししたいもの。ただそれがすべてなんだ。

ファックこそ俺が愛してやまないこと」(“When you’re young, the only place to go is inside. That’s just it. Fucking is what I love”)と、独自のセックス哲学を実直な台詞で表現するテリーが悪(女性の敵)として描かれ、ジェニーはあくまで被害者として描かれている。

映画の最後、テリーを探しだしたジェニーは、テリーが乱交パーティ会場2階の一室で新しくできた彼女と性行為に及んでいる様子を目撃してしまい、ショックのあまりそのままパーティ会場の下の階に降りてカウチで眠りにつき朝を迎える。打ちひしがれ自暴自棄に陥るジェニーを、テリーの親友のキャスパーはレイプし、翌朝、目を覚ましたキャスパーの放つ次の台詞で映画は幕を閉じる。「なんてこった、一体何が起きたんだ?」(“Jesus Christ, what happened?” 図8)。



図7 ゲイ・カップルを罵る場面



図8 ラストシーン
(映画『KIDS/キッズ』より)

『広がるミサンドリー』の著者ナサンソンとヤングは、この場面について次のように述べている。

最終的に、テリーの友人のキャスパーは、この映画のミサンドリーメッセージを明らかにする。ジェニーが反昏睡状態であるにも関わらず、彼は彼女と“セックス”する。彼女がエイズに感染していることを視聴者は知っているが彼は知らない。それは少年に対する究極的な報復ということだろう。レイプは死刑に値するのだ。²⁷⁾

両氏は、反フェミニズムの観点から、あくまでも、この映画は故意的にせよ偶然にせよフェミニズム・イデオロギーの副産物としてのミサンドリーを表象していると主張しているのだが、両氏の宗教的な観点から成される主張から抜け落ちている問題は既に述べたとおり、ミサンドリーが異性愛者の男性だけでなく、同性愛者の男性に対する差別や蔑視、さらには同性愛者男性間でもなされる差別概念であるということである。このように考えると、本作においてミサンドリーの対象として描かれているのは、異性愛者の男性登場人物だけでなく、先に触れた faggot と蔑まれるゲイ・カップルのように、同性愛者の男性もミサンドリーの対象として描かれていることを忘れてはならないだろう。

『KIDS/キッズ』が制作された数年前の1991年11月7日、アメリカではNBAのロサンゼルス・レイカーズで活躍した元プロ・バスケットボール選手のアーヴィン・“マジック”・ジョンソン・ジュニアがエイズ感染を告白し引退した。このことが、90年代半ばに本作のような異性愛者の

間で蔓延するエイズ感染を描く作品が世に出るきっかけとなったことは容易に想像できるだろう。

『KIDS/キッズ』と同じく、異性愛者の男性のエイズ感染を描いた映画作品として『The Cure』について話を移したい。『The Cure』は、ピーター・ホルトン監督のもと、先ほどの『KIDS/キッズ』と同じく1995年に制作されたエイズ映画である。本作は登場人物が大変少なく、主に少年2人と彼らの母親、そして病院の医師が中心に話が展開する。ある日、12歳の少年エリックの家の隣に、デクスターという名前の11歳の少年が引っ越してくる。デクスターは輸血が原因でエイズに感染した少年であり、そんな彼を最初エリックは敬遠していたが、その後2人は大の仲良しとなり、病気を治す薬を探す旅へと出ることになる、というのが本作の簡単なあらすじである。1980年代後半（1987年）のアメリカには、約4万人近いエイズ感染者が確認されており、そのうちの約2%はデクスターのように輸血によって感染したとされている。²⁸⁾

他の作品同様に、本作においても言葉によるミサンドリーは露骨なまでにわかりやすい形で描かれている。場面は、エリックとデクスターがスーパーマーケットのカートを引いて遊んでいる屋外、そこにエリックの同級生たちがやってきて次のように言い放つ。「ここはホモが遊んでいい場所じゃないぞ」(“This is a no homo zone” 図9)。これに対してエリックは、「俺はホモじゃない。こいつだって！こいつは輸血で感染したんだ」(“I ain't a homo! And neither is he! He got from a blood transfusion…” 図10)と反論する。エリックの同級生たちにとって、エイズに感染したデクスターは「ホモ」として位置付けられている。この短いやり取りからもわかるように、本作では、異性愛者の男性であってもエイズに感染していると同性愛者としてのスティグマの烙印を押され蔑まれるということが忠実に再現されているのだ。



図9 エリックたちを罵る同級生3人



図10 同級生たちと対峙するエリックとデクスター（映画『The Cure』より）

本作品は、これまでホモフォビア（同性愛嫌悪）の対象とされてこなかった異性愛者の男性がその対象として蔑まされる形で描かれるなど、ミサンドリーの多様性を提示するエイズ映画であると言える。

『KIDS』や『The Cure』と同じく、異性愛者の男性が主人公で、麻薬の静脈注射によってエイズに感染した男性を描いた作品として、1996年にイギリスで制作された『トレインスポッティング』が挙げられる。主人公マークの友人で麻薬依存症に苦しむトミーの描写など、注射針の共有でエイズに感染し、劣悪な環境下でただ死を待つ男性像をスクリーン上に演出する本作は、観客の目に、麻薬常用者の多くが男性でありエイズ感染者である、とったミサンドリックなス

テレオタイプを焼き付けたことだろう。本作のトミーは、麻薬常用者として、また同性愛者として描かれ、二重苦を強いられている。ここでも、同性愛者に対するエイズ・スティグマが麻薬依存問題に紐づける形で表現されているのだ。

『KIDS』、『The Cure』、『トレインスポッティング』は、いずれも異性愛者の男性（一部、同性愛者の男性）の間に蔓延するエイズ感染を、フリーセックス、輸血、麻薬依存といった問題に絡めて描いた作品であるが、これらの作品においてもやはり同性愛者を揶揄する言語・視覚表現が演出の一部として採用されている。映画『フィラデルフィア』も、同性愛映画にならないよう、法律事務所の上役たちをはじめとするホモソーシャルな男性たちを中心に描くなどの工夫は成されているが、エイズ映画において同性愛者の男性とエイズを結び付けて描く制作手法は、1980年代から2000年代までの20年間にわたって続けられており、この間に制作されたエイズ映画の32作品中、68.5%の登場人物が同性愛者男性として描かれているのだ。²⁹⁾しかし、『ロングタイム・コンパニオン』のように、同性愛者男性間でのミサンドリーや、『The Cure』のように異性愛者の男性がエイズに感染しているがゆえ同性愛者としてのスティグマの烙印を押されるなど、エイズ映画はミサンドリーがすべての男性に対する差別を指す言葉である事実を描き出している。そして、各作品の考察からも明らかのように、ミサンドリーの定義は流動的であり、時代の移り変わりに応じて再定義されるものであることも忘れてはならないだろう。

VI おわりに

イリノイ大学名誉教授で作家でもあるポーラ・トライヒラーは、エイズに対して文化的な意味付加、つまり、様々なラベリングが行われることに着目し、エイズのことを「意味の疫病」と呼んでいる。同性愛者特有の病から陰謀論、宇宙人の贈り物説、神の罰まで、ラベルは多岐にわたるだろう。³⁰⁾例えば、モラル・マジョリティと呼ばれるクリスチャン右翼集団や、しばしばメディアに取り上げられ物議を醸すカンザス州トピカを拠点とするウェストボロ・バプティスト教会など、極端なまでの反同性愛思想を掲げて抗議活動を行う宗教団体は今もアメリカに根強く存在している。ここまで紹介してきたエイズ映画作品も、トライヒラーの言うラベルの集まりであると言えるだろう。1990年代から2000年代に制作されたエイズ映画の多くが観客に与えるイメージは、愛、友情、正義といったポジティブなイメージよりも、偏見、差別、恐怖、死といったネガティブでステレオタイプ的なイメージが多くを占めているように思える。もしエイズ映画におけるエイズ表象にポジティブな意味という名のラベルが付与されるなら、これらの作品が公衆衛生の面でも、抗体検査に尻込みする若者の後押しになるなど、文化の面からの予防啓発という役割を担えるのではないかと考える。

2020年のパンデミック宣言以降、新型コロナウイルスによる死者数が急激に増加しているアメリカ合衆国では、トランプ前大統領のマスク不要発言を筆頭に、無症状であるならマスクをしなくていいといった風潮が広がりをみせている。これはひとえに、アメリカ人、特に異性愛者の男性たちの内に依然として根付いたマスキュリティ（男らしさ）とキリスト教的価値観に起因しているように思える。一部のアメリカ人男性のなかには、マスクをすることを弱さの象徴として捉え嫌悪する者がいるようだ。また、キリスト教における避妊具の使用禁止など、

映画『KIDS/キッズ』に描かれる男性による配慮を欠いた女性搾取に結び付く問題など、やはり異性愛者の男性の在り方を問い直すことが流動的な社会を作っていく上で不可欠なのだ。エイズウイルスのもたらしたミサンドリーについて論じた本稿は、ミサンドリーを再定義することで多様な男性差別の在り方について提示し、さらには我々の社会に依然として根付く異性愛者男性中心主義という名のジェンダー規範について考えることの重要性を、多くの人びとにとって身近で親しみのあるポピュラーカルチャー（映画）を通して効果的に再提示できたのではないだろうか。

注

- 1) ビルギット・アダム著、瀬野文教訳『王様も文豪もみな苦しんだ性病の世界史』（草思社、2003年）、12-13。
- 2) エイズに関連するスティグマは、ラベリング、ステレオタイプング、区別、ステータス・ロス、そして差別が挙げられ、同性愛者の男性はエイズ感染と同性愛性という二重のスティグマに苦しむことになる。Bradley E. Lott, et al., "The impact of stigma on HIV testing decisions for gay, bisexual, queer and other men who have sex with men: a qualitative study," *BMC Public Health* (2022) 22: 471, 2.
- 3) カナダ航空で働いていたガイターン・デューガス (Gaetan Dugas) がエイズ患者ゼロ号とされている。古郡廷治『アメリカ雑誌で生命の危機を読む Matters of Life and Death: AIDS, Narcotics and Bioethics』（筑摩書房、1988年）、11。日本では1985年3月22日に、アメリカ在住の男性を日本人「第一号患者」として発表している。滝口倫子「分裂する事実：1980年代日本のエイズ報道過程の分析」（北大法学研究科ジュニア・リサーチジャーナル 15, 2008年12月）、49-82。
- 4) 冷戦期のソ連関係者がアメリカ批判の材料として「エイズ＝米国防総省が秘密裏に作った人造ウイルス」といった主張をしたように、エイズウイルスを陰謀論と結びつける論者は多数いる。ヤコブ&リリー・ゼーガル著、川口啓明訳『THE ORIGIN OF AIDS エイズウイルス (HIV) は生物兵器だった』（ヒカルランド、2021年）。その他に、反LGBTQ+団体による心ない差別発言やウェストボロ・パプティスト教会のような反同性愛的宗教集団による「神はホモが嫌い」("God Hates Fags") 発言が例として挙げられる。
- 5) NBC News, "Number Of Monkeypox Patients Are Gay And Bi-Sexual Men." < <https://www.youtube.com/watch?v=HHE7HZn3Psc> > アクセス日：2022年10月5日
- 6) 1990年代、アメリカにおけるエイズ死者数は30万人近くに達する。
- 7) マリタ・スターケン著、岩崎稔他訳『アメリカという記憶－ベトナム戦争、エイズ、記念碑的表象』（未來社、2004年）、259。
- 8) セルロイドは、ハリウッドにおいて女性監督や脚本家の活躍の障壁に例えて使われる語であり、女性を含む社会的弱者の活躍を拒む「ガラスの天井」をもじった表現として用いられることがある。
- 9) 1950年代には、ゲイ支援団体であるマタシン協会 (Mattachine Society) やレズビアン支援団体のビリティスの娘達 (Daughters of Bilitis) が存在しており、1980年代以降、両親や家族を含めたレズビアンとゲイの団体であるPFLAG (Parents, Families and Friends of Lesbians and Gays)、エイズのパンデミック終結を目指して活動する政治団体ACT UP (AIDS Coalition to Unleash Power, 1987)、1990年には学校の教師たちによってはじめられたGLSEN (Gay, Lesbian and Straight Education Network) など、様々な組織が立ち上げられている。
- 10) Michael Kimmel and Martin Levine, "A Hidden Factor in AIDS," *Los Angeles Times*, June 3, (1990).
- 11) スターケン, 338。
- 12) 2018年のアメリカで行われたある調査では、HIV感染者の69%をGBQMSMの男性が占めている。

Lott, 1.

- 13) ポール・ナサンソン, キャサリン・K・ヤング著, 久米泰介訳『広がるミサンドリー ポピュラーカルチャー, メディアにおける男性差別』(彩流社, 2016年), 11-18。
- 14) 男性差別という点で, 同性愛者の男性に対するそれは, 「同性愛嫌悪・蔑視・差別」を表すホモフォビア/homophobia という語があるとする見解もあるだろう。しかし, ホモフォビアの対象があくまで同性愛者の男性であることを考えると, 彼らを異性愛者と区別するこの用語には, むしろ異性愛性という規範を固定化する側面がある。それゆえ, 同じ男性であるという点から, ミサンドリーは同性愛者の男性に対する差別も含む語であると考えられる。同じことが, 「両性愛嫌悪・蔑視・差別」を表すバイフォビア/biphobia にも言えるだろう。
- 15) 実在人物を脚色して描く映画作品は多くあり, 1970年代に全米を震撼させたジョン・ゲイシー事件を下敷きに制作されたスティーブン・キング原作の映画『IT』(1990年, 2017年)が挙げられる。同性愛者で殺人鬼のゲイシーをモデルにしたベニーワイズ(ピエロ)が登場するが, ベニーワイズは同性愛者としてではなく, 女性も男性も殺す性的にあいまいな存在の殺人鬼として描かれている。
- 16) ナサンソン, 233。
- 17) ピーター・ピオット著, 宮田一雄他訳『エイズは終わっていない—科学と政治をつなぐ9つの視点』(慶應義塾大学出版会, 2019年), 190。
- 18) 本研究は, 1980年代から2000年代のエイズ映画に焦点をあて, どのようにエイズ映画がアメリカの思想に影響を与え, パンデミックの再考に貢献するのかについて考察している。Kylo-Patrick R. Hart, *The AIDS Movie: Representing a Pandemic in Film and Television* (New York: Routledge, 2013), 8-9。
- 19) Hart, 9。
- 20) John Donald Gustav-Wrathall, *Take the Young Stranger by the Hand: Same-Sex Relations and the YMCA* (Chicago and London: The University of Chicago Press, 1998)。
- 21) 宮田一雄『[ルポ] これまでのアメリカ, これからの日本—ピープル・ウィズ・エイズ—エイズ時代を生きる』(太郎次郎社, 1992年), 43-44。
- 22) Cari Courtenay-Quirk, et al., "Is HIV/AIDS Stigma Dividing the Gay Community? Perceptions of HIV-Positive Men who have Sex with Men," *AIDS Education and Prevention* 18 (2006): 56-67。コラムニストのミケランジェロ・シニョリレは, ハリウッドにおけるゲイ監督や脚本家たちによる俳優たちに対する権力行使に触れ, 同性愛者の男性たちの本当の敵は, 同胞である同性愛者の男性権力者たちであると述べている。ミケランジェロ・シニョリレ著, 川崎浩利訳『クイア・イン・アメリカ—メディア, 権力, ゲイ・パワー』(パンドラ, 1997年), 98。
- 23) G. Cajetan Luna, *Youths Living with HIV: Self-Evident Truths* (New York: Routledge, 2013), x, 26-28。
- 24) ジーン・ブレイク著, 亀井よし子訳『RISKY TIMES —エイズは若者を見逃してはくれない』(プロンズ新社, 1992年), 22-23。
- 25) Luna, 48。
- 26) ナサンソン, 223。
- 27) ナサンソン, 221。
- 28) 宮田, 37。
- 29) ハートによると, エイズ映画32作品におけるエイズ感染している登場人物のジェンダー・アイデンティティの割合は次のとおりである。同性愛者男性68.4%, 異性愛者男性11.8%, 異性愛者女性13.2%, バイセクシャル女性1.3%。Hart, 48。
- 30) Paula Treichler, "AIDS, Homophobia, and Biomedical Discourse: An Epidemic of Signification," in Douglas Crimp, ed., *AIDS Cultural Activism/Cultural Analysis* (Cambridge: MIT Press, 1988): 31-70。